

方向

第一〇一号 一九八九年七月二十五日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向社

わ か も の

1983-1989.7.11. 原 田 憲 雄

けものがけものであればよかった

きみが堅琴をひけば

風は音をはこんだ

きみが歌うと

草木は手をつないで

ささめき

手をふりほどいて

わらった

鳥はとび

キツネははね

蟹は水にもぐった

きみは

剣をもたない

櫛をもたない

旗をもたない

土をふんで歩き

砂にすわり

草にねむる

きみは

ひとがひとであり

鳥が鳥であり

旗をもつ者は恥じた

風がそれを鳴らすのを

あざける声ときいたので

楯をもつ者は恥じた

鳥もけものも

そこをよけて行ったので

剣をもつ者は恥じた

草木がさざめきわらうのを

ののしる声ときいたので

剣をもつ者は闇に矢をしかけ

楯をもつ者は闇に矢をしかけ

旗をもつ者は闇に矢をしかけ

闇は音なく地球をかこんだ

地球をかこんだ闇からは

わかものよ

矢が飛び

きみの目を射た

きみは目を失った

剣をもっていたら

きみの目はつぶれなかった

楯をもっていたら

きみの目はつぶれなかった

旗をもっていたら

きみの目はつぶれなかった

けれどもきみは屈強くつぎやうなわかものだ

くろい目はつぶれても

闇は

もはや闇ではない

きみの肌は蔦色とびいろに焼け

きみの足は土をふみ

きみの臂しりは砂にすわり

きみの背は草に伏ふし

きみの豎琴がひびき

風はその音を運び

きみが歌うと

草木は

さざめき

けものたちが

はしり

鳥は

たかく飛ぶ

室 生 寺 光 清 寺 柴 野 純 孝

室 生 寺

1989.5.28.

本日『方向』第九八号お送りください。有難く、あわせて室生寺での東森善城氏とのお写真、なつかしく、今は昔、律師へ赤谷明海氏へを先達にして室生寺へ出かけたことを懐いだしています。

時は紅葉のころで、悪童一同、室生口へ着いたのは、もう日暮れに近い時分でした。タクシーで寺へ着いた時はもう真っ暗になっていました。わざわざそんな晩いころに出かけていったのは、他人様の話を安うけして、何とかなるだろうという気分でおったからです。

というのは（龍谷大学）哲学の渋谷先生のお宅へいったとき、「かつて室生寺で泊めてもらったことがある」とのことでした。ご承知のとおりのお人だった先生は、三高の学生時代、朝鮮・満州を無銭旅行やってのけ、旅順の戦跡を尋ねた強者です。こんな破天荒な人の話しを真にうけて、てっきり寺で泊めてくれるだろうと、門をたたいて頼んだところ、空頼みに終わったわけです。一同あまり品がよくないと見られたのか。

いたしかたなく、門前の安宿、その当時は主に巡礼などが泊まったところでしょう、戸をたたいて押し入り、一泊した次第です。

そんな宿ですから、夜具類もなく、寝間着もありません。晩秋の深山の夜はふるえるほど寒いので、せんべいぶとん一枚では、なかなか、ねつかれない。

そんなわけで、忽ち、とにかく内からの暖房をとることに衆議一決。その晩、寝たかどうかは、今では記憶にありませんが、宿にある飲めるもの、食えるもの、全部をとりよせて、一晚過ごしたのでした。もちろん大したものではなく、屋根の下で露にあわないだけの取柄でした。

翌朝、目をさますと、室生寺はすぐそこに見え、深山のたたずまい、溪流のせせらぎ、まったく心を洗われた思いでした。帰り道で竹内（不成）兄がいうには「あんなのならホテルへ泊まったらよかった」

それから当分はまったくの金欠でした。

光 清 寺

1989.7.5.

本日『方向』贈与いただき御礼申し上げます。とうとう百号に達せられ、貴殿ならではの感、ひとしおです。奥様の光清寺の御文章、昔を憶いだしています。高田へ益雄君のことなど感慨無量です。年賀状に、宛名を「千本光清野狐禪寺」と書いて出したところ、和尚かんかんだったと、高田君が笑っていたのが昨日のようです。ずいぶん非常識なことをしたものです。いつも晩のみ出入りしたので、タイサン木など、まったく憶えています。へ赤谷へ明海君が「ヤクユウ君おりますか」といったのも憶えています。光清寺へは戦後一回寄りました。

※右二通、柴野氏の許しをえて掲載する。その「昔」というのは、一九三七、八年ごろをさす。出てくる人名のうち赤谷明海、竹内不成、高田益雄の三氏は故人となった。渋谷先生は、戦後、故郷に帰り、荒れ地を拓いてただひとり自活しておられると聞いたが、その後の消息は知らない。赤谷氏は、友人中でも最年長であり、唐招提寺の僧で、京都花園の法金剛院の副住職だったので、みな「律師」と呼んだ。高田氏は、早く父母に死に別れ、伯父である心山義繁師の弟子として臨済宗の光清寺で得度した。「益雄」は、エキユウ、エキオウ、ヤクユウ、ヤクオウ、のいずれかの読み方をしたはずだが、心山師は「ますお」、きょうだい弟子たちは「まっさん」と呼んでいた。氏は、ビルマへ出発するまえ、会いにきてくれたが、わたしは不在だった。戦死した。(1989.7.18.)

明 暗

敵の猛反撃をうけては死闘をくりかえしている南太平洋の最前線から命からがら、やっと内地にたどりついたのは昭和十九年の五月の下旬であった。我々が最初に上陸したのは宇品湾にある似島であった。

緑の松林に覆われた、その島で一服しながら蟬のなくのを聞いた時、始めて内地へ帰ったのだという実感が、しみじみと湧いてくるのであった。内地も、もう夏が近いのだ。扶桑丸でマニラから一緒に帰った大部隊もいたので検疫所は混雑を極めたが、それでも午後の三時頃には、どうやら、かたがついて、我々は宇品港に近い原隊に入った。永い航海の緊張がいつべんに解けたので、朝からの検疫所での疲労も加わって、我々は中隊の床の上で転がって、夕飯までしばし放心虚脱の状態であった。

時々起き上がってはタバコを一服やってまた横になるのであったが、ぼんやりとした頭の中を去来するのは、マニラから一緒に帰還した、あの部隊のことである。外地での任務を終えて無事かえった彼らは、今頃は、それこそ喜び勇んで、無罪放免の心持で故山へ向かっているであろう。今にして思えばかれらはフィリッピンからの最後の帰還兵であった。やがて満期となり、家族に会える彼らの笑顔が見えるようだ。

それにくらべると、同じ内地帰還と言っても、我々には、やがてまた次の乗船任務が待っているはずだ。こんなことを思うとおのずとみじめな気分にならざるを得ない。今の我々にとってのせめてもの願いは、故郷への外

泊だけである。次に乗船すれば、生還は期待できない。

このようなことを考えながら横になっていたのだが、夕飯近くなったとき、中隊本部へ行った分隊長が帰ってきて「外泊は駄目だ」と告げる。吉報を待ちかまえていた我々は啞然たらざるを得ない。これまでは長い航海の後では、二泊の外泊が普通。こんどは、九死に一生の連続であった。それを外泊禁止とは。理由はどうやら、日増しに不利になっている前線情報の漏れるのを恐れてのことらしい。

それから数日は、まことに味気ないおもいで雑務、使役にしたがった。機関砲の演習の合間に、暇を見つけて、近くの比治山公園まで出かけるのが、唯一の慰めであった。山の上から見わたす軍都広島は、数条の大きな河が流れ、ところどころに緑豊かな樹木の繁みがあり、平和そのものの美しい眺めであった。

ああ、この美しい風景もいつまで見られることか。誰しも、そんな思いにかられたであろう。また同時に、明日知れぬ我身のことには及ばざるを得ない。ところで、そのわれわれの運命を決めるのが、晩の点呼の時の命令伝達であった。

命令伝達の出る日時は予測できないが、文句はだいたい次のようである。

明日、誰某以下、次ノ者達何名ハ、〇〇丸ニ乗船スベシ。

居残る者も「今日は人の身、明日は我が身」という感につまされ、お互に乗船する戦友たちの武運を念ずるのである。

我々が下船してから、こんな場面が二、三回もあって、おのれの番が近いと思われ出してから一週間もたった

頃、ある晩の点呼に次のような命令が伝達された。

今回ワガ戦砲団ニオイテハ、時局ニ鑑ミ、門司港ニ連絡班ヲ設置スルコトトセリ。某大尉以下三十名ノ者ハ明朝九時、タダチニ出発スベシ。

そして各中隊から選ばれた三十名の名前が順次に読み上げられ、第十七中隊のところへ来たとき、自分の名前が聞こえてきた。とっさに、当分は船に乗らなくて過ごせる、という感じがしたが、同時に他の戦友達にたいしてちよつと気がひける思いでもあった。なぜ自分のような不成績な者が選ばれたのか、その理由は今もなお分からない。宿痾の痔瘻のためだったのかもしれない。

門司市の第一夜

翌朝、点呼が終ると、ただちにY君とともに出発の準備をして、部隊本部の前に駆けつけた。すでに各中隊からの兵が集まっていた。将校、下士官らしい姿も四、五名見られた。連絡班開設に先立って必要な物品はすでに送られていたので、我々一同は身の回りの物だけといういたって軽装であった。広島駅までは徒歩で行進し、そこから下関行きの汽車に乗ったのであるが、ちよつとした開放気分になり、一同、小学生の遠足のように浮きうきと話しがはずむ。車中で昼食をすませて、下関駅についたのは正午すぎ。汽車から降りると、すぐ連絡船の乗り場へと急ぎ、門司港についたのは二時頃だった。

我々が属する連絡班の本部は、埠頭に近い郵船ビルの四階におかれた。門司港駅まで先送されていた梱包を本

部へ運んだり、事務室の設営に追われたりして、どうかその日の仕事が片づいたのは、もう夕暮れだった。炊事場や寝所の準備は翌日回しとなり、我々三十余名は、その夜は町の旅館で一泊することになった。

旅館は、当時としては一流のものと思われた。外泊こそふいになったが、戦地で夢にまで見た布団にくるまっでゆっくり寝られるとは、まったく望外の喜びだった。夕飯も旅館から出、食事がすむと、交代で軽く風呂にはいり、やがて柔らかい布団のなかで、昨晚から今までのまる一日のことをぼんやり考えながら横になっている。つい二カ月ほど前にいたニューギニヤの連日の苦闘のことなどが、しみじみ回顧される。が、それも、何か遠い地の果てのことのように思われるのであった。しかし回想もほんのしばらくのことで、柔らかい布団の中で、疲れ切った体は、深い泥沼のような眠りにおちいつていた。

空 襲

身も心もともに完全に解き放され、深い眠りにはいつて、どれくらいたったろうか。無感覚に近い神経に対して、どこからともなく風のさわめきにも似たものが伝わってくる。突然、意識がもどって、目がさめた。「空襲だ」と誰かが叫んで、被っている布団をひきはぐ。目をさましたとたん、あたりは、すでに、近くから、あるいは遠くから殷々とひびくサイレンの音の渦のなかにあった。サイレンの響きにまじり狂ったように打ち鳴らす半鐘の音も聞こえてくる。どうやら本物の空襲だ。ああ、母国に帰って空襲に遭おうとは、しかも、こんな所で、まさに、天界の安楽から不安の奈落へ、だ。

完全な燈火管制で室内は真っ暗、仲間の顔も見えない。転倒する心に「おれたちはソロモン歴戦の勇者だ」と言い聞かせるようにして、手早く軍装をととのえ、階段を降り、表へ飛び出した。外の方がすこし明るいようだ。空には三日月がかかっている。身ひとつの我々の動作が速すぎたのか戸外は人影もまばらで、意外に静かであった。全員整列を待つうち、表は次第にざわめき、警防団らしい人が叫びながら走ってゆく。サイレンは鳴り続ける。あの半鐘も。旅館の向かいの家から主婦らしい人が泣き声で「どうしたらいいんですか」 警防団らしいのが「いつものようにしなさい」となだめるような声。

まもなく点呼。異常なし、の報告を受けると、指揮官は命令する。「全員、駅裏広場の高射砲陣地へ駆け足」「それッ」と隊伍を組んで、人ごみをかきわけ走る。ほとんど闇黒で、来たばかりの土地、どの方向に走っているのか、かいても分からない。サイレンはしばしも鳴り止まぬ。今にも姿を現わしそうな敵機の幻影におびえる心も、「ざっざっ」と高く響く自分自身の軍靴の音を聞いていると、妙に気持が落ち着いてくる。街の人々は果たして、どんな思いで、この軍靴の音を聞いているだろうか。闇黒のなかを所々で曲りながら、所定の場所に着いたのは、出発から十五分ほどたっていたろうか。広い駅の構内の一隅で、いろんな荷物が野積みになっていた。我々は多少息切れを感じていたが、休む暇もなく、砲手達は砲座につき、他の者は少し離れた弾薬集積場から死物狂いで弾薬を運んだ。妙なことには、何十発も運んだのに、敵機はいっこう姿を現わさない。しかしサイレンは鳴り渡り、乱打する半鐘は一時も止まぬ。果たして敵機はやってくるのか。

情報のつかめぬまま、交代で物かけにはいって小休止をとる。ときどき立ち上がって四方を見渡すが、門司の

町は高い山の斜面にあるので、暗い山影にさえぎられ、輪郭がはっきりしない。ときおり、一瞬、燈火の漏れるのが見えるだけだ。おそらく、慌てふためく人々でカーテンがゆれるのである。サイレンは鳴るが町はしんとし、人々は、かたずを飲んでのことだろう。山影に沈む家々の人達のことを思うにつれ、頭にひらめくことは、我々がラバウルで嫌というほど味わった猛烈な絨毯爆撃である。ここであれが始まったら、街はたちまち地獄の猛炎につつまれ、阿鼻叫喚のちまたとなるだろう。

待機して三十分ほどしたころ、西の方の山の向うから、鈍い爆発音が聞こえはじめ、サイレンがひとときわ激しくなった。無線手から情報を伝えてくる。敵機は、支那、四川省、成都から飛来、とのことである。支那にはいま何十万の日本軍がいるはずである。その上を傍若無人に飛来し、東支那海を越えて、北九州を襲ってきたのだ。その第一目標は八幡の製鉄所である。聞こえはじめたのは爆弾の破裂音であろう。次には小倉の造兵廠のはず。敵機の出現はあと数分というところだ。

果たして間もなく大気を圧する爆音が闇黒に響き、数条の探照燈が大空を模索する。爆音は次第に高まり、やがて一条の光が機影をとらえた。敵ながらよくぞ飛んできたものだ。監視係りが敵機の種類を分析する。「コンソリ」だ。「B17」だ。高度三〇〇メートル。高射砲が一斉に撃ちはじめ。弾はなかなか当たらない。一機が頭上を過ぎたころ、次の一機が現れ、それが過ぎるとまた一機が現れるという具合に、一列になっていて、各機はかなりの距離をとり、ゆっくり南の方に旋回してゆく。十数機だが、全部通過するのに三十分もかかったように感じられた。幸い、我々のいる門司市には投下爆弾はなかったようである。八幡の上で全部落とし身を軽

くしたのであろう。敵機がぜんぶ姿を消すと、海峡や山々に響きわたっていたサイレンは次第にきえ、半鐘もいつしか静かになっていた。

門司の被害は皆無なので、ほっとしたが、警報が解除されても、我々はなおその場に居残り、夜が明けてから、旅館に引き上げ、朝の点呼となった。

後 書 き

この空襲は、本土空襲としては第二回目であった。

第一回目は、これより一年以上も前の、艦船からのものである。しかし、敵は何らなすこともなく、本土をがすめて行った程度であった。

それに対し、二回目は初めから目標を定めた戦略爆撃であって、この一カ月後サイパンの玉砕があり、敵はいよいよ本土爆撃に全力を注いだ。そして一年後には、門司の町も空襲で灰燼に帰したのであった。

甘才の転輪くぐり

1989.7.4.

原 田 慶

内科医院の待合室には、いつも見馴れた顔が多い。たまに、風邪をひいたよちよち歩きなどが連れてこられると、みんなの注目の的になり、しばらくはだれもがにこにこしている。たいていはわりあい静かで、挨拶がすむ

とそれ以上話をする人はすくない。

おぼあさんが、杖代りの手押車を入り口のドアの外に止めて、ゆっくり入って来るとスリッパにはきかえる。診察券を受付にだして、腰掛けの方へくる。先に来ていた人が、「こんにちは」と声を掛ける。「ああ、おいでやす」と返事をする。「来ておられましたね」というくらいの意味だろうか。「ゆうべはよう降りましたなあ」「ほんまに、今日はむしむししますわ」それとぎれることが多い。あっさりしているが、時には変わった話もあつて、「ゆうべ隣に泥棒が入りましてなあ、反物をごっそり持って行きましたんや」「反物で」「呉服屋はんどすにや、それでもええもんは持って行ってしまへん、呉服のことをよう知らんもんが持って行ったのどすやろな」「そうどすか、戸の鍵は二重にしとかとあきまへんえ」「ガラスを割ってそこから手を入れて開けたらしおっせ」ぼそぼそとした話し声でも、そっくり聞こえてしまう。

むこうの隅でおぼあさんとおじいさんがしゃべっている。

「今日は何日どす」

「今日は二十四日どす」

「ああ二十四日どすか、ほなあしたは天神さんのひいどすな」

「そうどす、天神さんのひいで、六月二十五日は天神さんの誕生日どすさかい、ちえの輪くぐりどす」

「へえ、そうどすか」

「そら、こんな大きい輪がこしらえとおっせ」

とおじいさんが両腕で輪を描いてみせた。他のおばあさんが口をはさむ、

「そうどすな、あしたはちえの輪どすな」

天神さんは字問の神様として、参拝の人を集めているから、智慧の輪だと思っているのだろうか、それともそういう呼び名で通っているのだろうか。

くぐりゆく茅の輪のさきの夏嵐 不浄を聞きて悟りし迦那那
へ「珂雪」原田禹雄歌集

茅の輪くぐりは水無月夏越祓として、あちこちの神社で行なわれている。私は見たことがなかったけれど、おじいさんの話を聞いて行ってみたくなった。昨年テレビのニュースで見た時に、輪の茅を抜いて参詣の人が持つ帰るということを聞いたので、二十五日には朝の九時過ぎに家を出て、天神さんへいった。参道には露店が並びっぱいの人波だった。やっと楼門までたどりついて、石段を上がり門をくぐると、太鼓の音がしてお神楽が舞われている。若いみこさんが緋の袴で刀をかざして舞っていた。終わって本殿までいったが、どこを見ても茅の輪が無い。日をまちがえたのかと思ひながら、社務所へ行ってみると、細い茅の縄で作った、繻十センチ余りの茅の輪があり、輪の上のほうに竹ひごを渡して、夏越大祓無病息災北野天満宮、と書いた御幣がさげている。白い紐がつけてあって吊るすようになっていた。三百円で次々と買っている。一万円さつを出して、十三個くださいと言っている人があった。近所にも配るのだろうか。傍に説明が書いた紙が積んであったので、一枚もらってきた。それによると、

「備後風土記」には、素戔嗚命に旅の宿を供して難儀を救った蘇民将来が、命の教えに従って腰に茅の輪を下

げたところ、その子孫に至るまで厄疫なく立ち栄えたという逸文があり……

というようなことと、輪のくぐり方が図で示されていた。輪の中央から左まわりにくぐり、中央にもどって右へまわりもう一度、輪をくぐって左へ抜ける。三回くぐることになるらしい。そしてくぐる時に、

一、みな月のなごしの祓ひする人は千歳の命のぶるといふなり

二、思ふ事みなつきねとて麻の葉をきりにきりても祓ひつるかな

三、蘇民将来 蘇民将来

これを繰り返して唱えると書いてある。それにしても大きな茅の輪はどこにあるのだろう。ちいさな茅の輪を売っているみこさんに、遠慮しながらたずねてみると、みこさんは、向うの門にあります、と言われた。通ってきた門にそんなのがあったらどうかと思いつながら、楼門まで引き返して見上げた。あった！なるほどみこさんが少し妙な顔をして教えてくれたはずだった。そこにあったのは、みごとに、茅の輪の残骸だった。

門の大きさにそって、青竹が丸く輪を描いており、はるか上の方に茅の束がいくつか、くくりつけられてぶらさがっているものもある。これが茅の輪、と思つてつくづく眺めていたが、その輪の前に脚立をすえて、カメラを持ってたつていた男の人にたずねてみた。「ちよつとお邪魔します、この竹の輪にずっと下の方まで全部、茅がつけてあったのでしょうか」若いカメラマンは私の方を見て、「ええそうらしいです、でも夜が明ける前にみんな抜いてしまつて、こんなになつたそうですよ」と教えてくれた。これでも早いかなと思いつながら来たのに、なんとみなさんは早いのだろう、私はしかたなく、また人混みの中へおりました。

翌日の新聞をみたら、天神さんのことが出ていた。

午前五時、開門と同時に、待ち兼ねた信者らが、楼門に取り付けられた茅の輪をくぐった。十数年前から、茅の輪のカヤを自宅の門口に飾る風習が広まっており、この日もお参りの人たちは、輪からカヤを次々に抜き取った。三十分ほどの間に、直径五メートルの茅の輪も、青竹がむき出しになった。

と書いてあり、私が見たのと変わらない茅の輪の骨と、それでもまだ下に落ちた茅を拾っている人のある写真が出ていた。お年寄りの人たちは「ちえの輪」と言っていたけれど、それは発音だけのことで、たぶんこの夏越祓のことなのだろう。祓園祭のちまきを門口にかけるのと同じで、茅の輪をくぐって疫を祓っているのだと思う。

そう思って北野あたりを通った時に、気をつけて見ていたら、やはり昨年の祓園祭のちまきが飾ってある家と、天神さんの三百円の茅の輪か、大きな輪から抜いてきた茅を、自分で輪にしたものが飾ってある家が、あちこちにあった。そのどれか一つがかけてあって、いくつもかけている家はさすがに一軒もなかった。

ちまきには「蘇民将来子孫者也」と書いた赤い紙が張ってある。このように書いてあることに、私は今まで気がつかなかった。百科事典に、この輪はへびの形象で、水をつかさどる神としてのへびの信仰が、大祓の水による浄化と結びついたのでだろう、というようなことが書いてある。

六月三十日にはもう一度、天神さんで水無月夏越祓の儀式があった。その時には径二メートルほどの、あおあおとした茅の輪が、本殿の前に作られていた。これには「茅を抜いてはいけません」という札がさげてあった。修学旅行の中学生が、「これは何だ、芽を抜いてはいけませんと書いてある」と言いながら、くぐってみたりし

て不思議そうに眺めていたが、儀式には早すぎたので、お参りの人はあまりなかった。

茅は春に花穂を出す、葉に包まれてつんつんと出てきた頃に、中の穂を食べるとやわらかくて甘い。私は子どもころ、このつばなを学校から帰りにたくさんつんだ。とても甘いと思ったが、茅に疫を祓う力があるとは知らなかった。

医院の待合室で、今日は祇園祭の話をしている人があった。だれでもいちいち見物に出かけて行くわけではないが、祭などの話で季節を味わうことができる。

「祇園祭の十七日にはたいいてい雨はふらしまへんな、天神さんは時々降りますけど」

「そうどす、わたしは昔から母によく聞いてました、天神さんは、はでなことが嫌いやったさかい、お祭にもよう雨がふるのやて。なんや知りまへんけど、母がそない言うてましたな」

このあたり北野では、やはり、それとなく天神さんをひいきしたくなるのも、無理のないことだと思う。

浮

か

れ

猫

1989.7.8.

原

田

慶

泰山木のことを書いたので、このあたりのことに詳しい方から、光清寺さんには、浮かれ猫の絵馬がある、と教えていただいた。

そういえば、立て札に書いてあったのに、注意していなかったことに気がついて、午後、まだ門の閉まらぬうちに行ってみた。門は北向きで、絵馬の掛けられている弁天堂は、門のすぐ内に、墓を背にして西向きに建っている。深閑として人の気配もなく、弁天さんの前には賽銭箱がつるしてあるので、誰が参ってもよいということ

だろうと思つて、寺に断わらずに入つていった。絵馬は、弁天堂の南側の軒下に掛けられていた。

浮かれ猫、というから、猫が後ろ足で立って踊っているのだからかと想像しが、そういうものではなかつた。ふっくらした、白と黒のまだらの猫が、耳をびんと立て、尾を胸の前に持つてきて、足を腹の下あたりにまとめふと頭を上げた姿なので、全体に丸い図になっている。目は細くあけているらしいから、油断はしていないのだろう。猫はいきという時には、素早く跳ね上がるから、こういう形をしていても、相手の動きをよく見て、ふだんによほど馴れていなければ捕まりはしない。猫の右上からさしかけるように、ボタンかシャクヤクか、白い大きな花が二輪、咲いている。この花があるために、猫は上品に美しく見える。雄か雌かそこまではわからない。雄は季節になると、雌をさがして、どこまでも出かけて帰つてこないから、やっと帰つてきた時には、あばら骨が見えるほど痩せていることがある。ボタンやシャクヤクの季節に、花の下で丸くなっているのなら雌だろうかと思つた。それがまたちがつていた。この猫には伝説があつたのである。

宝曆七年、伏見の宮が江戸へ移られた時に、宮家の鎮守、玉照神社にかかつていたこの絵馬を、光清寺に納められたのだそうである。その後、この猫は、夜中に三味線の音が聞こえると浮かれて踊りだし、世間を騒がせた。時の住職松堂和尚が、法力を使ってこれを封じ込めたところ、和尚の夢枕に衣冠束帯の武士が立ち、「自分は稲荷大明神の召使いで、三味線の音を聞くと知らないうちに踊りだしてしまふ。和尚の法力で封じられて、不自由で仕方がない、今後は軽はずみはしないから封を解いていただきたい」とたのんだ。和尚はかわいそうに思つて、封を解いた。このことが世間に知られて、「浮かれ猫」といわれ、やがて、猫も浮かれだすほど三味線がうまくなる、と評判になつて、上七軒や五番町、祇園や島原の芸妓さんまで参りに来たそうである。猫の皮を張つた三味線の音を聞いて、猫が踊るといふのは、何か因縁のありそうな話だけれど、今では、芸妓さんのお参りもないの

だろうから、この、さむらい猫にも、頭を床に下ろし、手足を思いきり伸ばしてゆっくり休んでもらいたいような気がした。もう二百何十年か、耳を立て、頭をもちあげて眠ることもできないのだなあと思う。

静まりかえった境内では、虫の羽音さえ聞こえるほどだったが、墓地をのぞいてみると、作業着着のおじいさんが、風呂場用の小さな腰掛けを、カラカラと引きずって草取りをしておられた。以前からいた人が亡くなって、あたりらしく来たので、泰山木のことをたずねてみたが、そういうことは何も知らないといわれた。大きな墓石がびっしりと並ぶ墓地はきれいに掃除されている。町の中の墓地は、どうしても、回りを民家に囲まれて、それが家の裏側になっているから、干し物などが見えてすこし騒がしい感じもするが、毎日この石の間で黙って草を取っている人のことを思つて、私もそうつと音を立てないようにして門を出た。

光清寺から北東に約二キロメートルの所に「猫寺」と呼ばれる寺がある。こちらにも、浮かれ猫の伝説があつて、絵馬ではなく「猫松」という大きな木がある。背丈はあまり高くはないが、幹とかわらないほど太い枝が、十メートルもあるかと思えるほど伸びていて、まるで猫のにこ毛のような細かい葉がその樹を緑で包んでいる。この松があるから猫寺なのではなくて、昔、この寺が衰えた時に、猫が助けたという話しが伝わっているのである。

この寺は「称念寺」といって、西陣の織機オリの音のひびく町のなかにある。慶長十一年（一六〇六）に松平伊豆守信吉が、岳蒼上人のために建立した寺だそうである。三代目の住職の時に、どういふわけか、松平家と絶縁となり、後援者を失った寺に残ったのは、和尚さんと猫一匹。和尚さんは毎日托鉢にまわっていたが、ある中秋の満月の夜、寺に帰ると、猫が手拭いをかぶって、月に浮かれて踊っていた。怒った和尚さんは猫を追い出した。あとで心配になっていた和尚さんの夢に猫が現れ「明け方、二人の武士が寺を訪れるでしょう。丁重におもてなしされるがよろしい」といった。そのとおり、翌朝、松平家の武士がやってきて、姫君の葬儀を依頼した。それから絶

縁が解け、寺は立ち直った。姫の亡くなるとき、猫がのりうつって遺言させたのだと言い伝え、記念して植えたのが猫松である。こちらの方は、猫の姿をしのぶことのできる物はないが、現在は、境内に猫や犬の墓があるとのことで、最近のベットブーム以前から、動物をとむらっておられると聞いた。

境内はほとんどがガレージに使われていて、決して豊かな感じはしないが、どこかにこまやかな心遣いのたまたよう寺である。門の外に何枚もの立て看板があり、その一枚に「道に捨てられる塵芥のなかにも生命がある」というようなことが書いてあり、これが「猫寺」の心なのだろうという気がした。

激しい同 情 1法華経巡礼 331 1989.7.18. 原田憲雄

前号の「法華経巡礼32」で、砂川一郎氏の「宝石は語る」から『旧約聖書』の「サバキの胸当」にはめこむ十二の宝石名を引用したが、新宮の若林芳樹氏が次のように教示された。感謝して転記する。

一九八八年に発行された新共同訳聖書 出エジプト記28章と39章とは 裁きの胸当宝石を次のように記しています。

- | | | | |
|-----|------|---------|-------|
| 第一列 | ルビー | トパーズ | エメラルド |
| 第二列 | ざくろ石 | サファイア | ジャスパー |
| 第三列 | オパール | めのう | 紫水晶 |
| 第四列 | 藍玉 | ラピス・ラズリ | 碧玉 |

さて、乱れた心をもつ者はどうすればよいか、というところで前号の記事は終わった。その問いに対する答え

が、『法華經』では次々に展開されるようである。わたしのまずしい体験を語るより、その方に耳を傾けよう。
2-19. 未来にも幾千万多数の仏がいて、その数は考えられず、はかり知れぬが、

かれらジナ、最高の世界の主も、説きあかすだろう、この方便を。(98)

巧みな方便は、尽きることなくあるのであろう、かれら世界の導師たちに。

その方便でみちびくだろう、幾千万の衆生を汚れなき仏の智慧に。(99)

いかなるときでも、ひとりもない、それらの法を聞きながら仏にならない衆生などは、

これこそ如来の誓願なのだ、覺りにむかって修業をし、ひとにもそこへ向かわせるのが。(100)

幾千万億無数の教えの入口が、未来に説かれることであろうが、

この一乗を開示して、説法されよう、これこそ如来の立場だと。(101)

法の指導はつねに確定しているし、法の本性は光りかがやいていることを、

知っていて、両足の最高者、仏は説きあかすだろう、この一乗を。(102)

法の永遠・不変性は常住する、この世界で、不動のものとして、

仏たちは、この覺りを、大地の壇で説きあかすだろう、巧妙な方便により。(103)

anāgatā pi bahu-buddha-koṭyo acintyā yeṣu pramāṇu nāsti /

te pī jinā uttama-lokanāthāh prakāśayisyanti upāyam etaṃ ||98||

upāyakaūśalyam anantu teṣāṃ bhaviṣyati lokavināyakānāṃ /

yenā vineṣyanti ha prāṇa-koṭyo bauddhasmi jñānasmi anāsravasmin ||99||

eko 'pi sattvo na kadāci teṣāṃ śrutvāna dharmam na bhaveya buddhah /

prañihānam etad dhi tathāgatānāṃ caritva bodhāya carāpayeyam ॥100॥

dharma-mukhā koṭi-sahasr aneke prakāśayisyanti anāgate 'dhve /

upadarśayanto imam ekayānam vaksyanti dharmam hi tathāgatatve ॥101॥

sthitikā hi eṣā sada dharmanetrī prakṛtiś ca dharmāṇa sadā prabhāsvarā /

viditva buddhā dvīpādānam utamā prakāśayisyanti nam ekayānam ॥102॥

dharmasthitiṃ dharmaniyāmatām ca nityasthitām loki imām akampyām /

buddhās ca bodhim prthivīya mande prakāśayisyanti upāyakausalam ॥103॥

さきには、過去の仏が、一乗の法を説いたことをのべた。そうして一乗とは、無上道へのただひとつの乗り物のことであり、すべての衆生を仏と同じ覺りに導くことで、それを仏乗ということが説かれた。ここでは、未来に出現する仏も、過去の仏と同じことを説かれるだろう、と予言する。

2-20. 十方には、人や神に供養され、現にいる、ガンジス河の砂の数ほどの仏たちが、

この世で一切の衆生たちを幸福にするため、かれらは説く、この無上なる覺りの道を。(104)
巧みな方便を説きあかし、種々の道をも開き示すが、

一乗をこそ照らし出す、この最高の寂靜の境地におられる仏たちは。(105)

一切の人間の行動を、すなわち、意向、過去の實踐、

その精進と勇氣を知り、願いを察して、仏たちは説きあかすのだ。(106)

あまたの譬喩や、論証や、理由を示し、導師は知識の力により、

衆生のさまざまの願いを知り、とるべきさまざまの道をさし示す。(107)

daśasū diśāsū nara-deva-pūjitās tiṣṭhanti buddhā yathā gaṅgā-vālikāḥ /
sukhāpanārthaṃ iha sarva-prāṇiṇāṃ te cāpi bhāsanti mam agrabodhiṃ //104//
upāyakaṅśālyā prakāśayanti vividhāni yānāny upadarśayanti /
ekam ca yānam paridīpayanti buddhā imāṃ uttama-śānta-bhūmiṃ //105//
caritam ca te jāniya sarva-dehināṃ yathāśāyāṃ yac ca purā niśevitam /
vīryam ca sthānam ca viditva tesāṃ jñātvādhimuktiṃ ca prakāśayanti //106//
dr̥ṣṭānta-betūn bahu darśayanti bahu-kāraṇāṃ jñāna-balena nāyakāḥ /
nānādhimuktāś ca viditva sattvān nānābhiniṛhār upadarśayanti //107//

ここでは、現在の、しかし、娑婆世界ではない、十方の他土の仏もまた、同じ教えを説くというのである。娑婆世界は、おおざっぱながら、この地球世界といっておいてもよからうか。もっとも、『法華経』の成立したときに、今日われわれが言うような地球という考え方のなかったことはいうまでもない。娑婆は、saṃの音写で、「忍土」と漢訳し、そこにすむ衆生は、内に種々の煩惱があり、外に風雨寒暑などがあって、苦惱を耐え忍ばねばならないから、この名称がある。けれども、今のこの地球世界こそ、煩惱に満ち、災害に満ちた世界だから、娑婆世界というのにふさわしい。

2-21. ジナの王たる導師として、わたしもそこで生れたのだ、衆生を幸福にするために。

わたしは示そう、仏の覺りを、幾千万億さまさまにとるべき道も。(108)

多くの種類の法を説き、衆生の意向や願いを知り、

さまざまな方便で喜ばせよう、これがわたしに独特な知識の力だ。(109)

わたしはまた見る、貧しい衆生を、智慧も福德も失って、

輪廻のうちにおちこぼれ、難所にこめられ、苦惱の海に沈んでいる。(110)

ヤク牛が尻尾を愛するように渴愛に執着し、かれらはいつも目が見えず、

高貴の仏を求めもせず、苦惱の終局に向かうべき法を探もしないのだ。(111)

六道に心しばられ、悪見・邪想におちいて、身動きならず、

苦惱より苦惱へと追い続ける。かれらへのわたしの同情は激しいのだ。(112)

ahaṃ pi caitarhi jinendra-nāyako utpanna sattvāna sukhāpanārtham /

sandarśayāmi ima buddhabodhiṃ nānābhīnirhāra-sahasra-kotibhiḥ //108//

deśemi dharmam ca bahū-prakāram adhimuktim adhyāsaya jñātvā prāṇinām /

samharsayāmi vividhair upāyaibḥ pratyātomicam jñāna-balam mamaitat //109//

ahaṃ pi paśyāmi daridra-sattvān prajñāya puṇyeḥi ca viprahīnān /

praskanda saṃsāri niruddha durge maghāḥ punaḥ dukkha-parapparāsu //110//

trṣṇā-vilagnāś camarīva vāle kāmarī ihāndhī-kṛta sarva-kālam /

na buddham eṣanti mahānubhāvaṃ na dharmā mārganti dukhānta-gāminām //111//

gatīsu satsu pariruddhadha-cittāḥ kudṛṣṭīsu sthitā akampyāḥ /

duḥkhena duḥkhanupradhāvaśānāḥ kṛuṇya mahyam balavantu tesu //112//

※本誌第一〇〇号に対し、読者各位から、励ましや祝いのお言葉をいただきました。厚くおん礼もうしあげます。一々にお名前を掲げることが遠慮いたしますが、ご趣旨を生かして、さらに歩みを続けたく存じます。同人一同